



写楽を誕生させた蔦屋重三郎（1750—197）

江戸の芸術の源泉・浮世絵

二六〇年にもなる鎖国政策を維持した江戸時代は長崎を経由して細々と伝達される外国の情報以外には孤立しており、結果として様々な独自文化を誕生させることになりました。その中心になったのが江戸の一般大衆に愛好された文化で、『東海道中膝栗毛』や『南総里見八犬伝』に代表される文芸、芭蕉や一茶に象徴される俳諧、そして絵画では浮世絵が流行しました。

浮世絵は上方でも流行しましたが、やはり多数の人間が生活している江戸が中心で、浮世絵師といわれる画家は記録されているだけでも一六〇〇名余になるほどの隆盛でした。それらの絵師が現在の出版会社に相当する版元との契約や依頼で原画を制作すると、版元は版木を製作して大量に印刷して庶民に販売するという仕組みでした。

現在の書籍の出版でも、素晴らしい小説を執筆する作家であっても出版会社に販売の力量がないとベストセラーになりにくいし、有力な出版会社でも筆力ある作家との出会いがないと成功しないように、江戸時代の浮世絵師と版元との関係も同様でした。今回は江戸時代中期に美人画で有名な喜多川歌麿や役者絵で人気を獲得した東洲斎写楽を売出して成功した人物を紹介します。

『吉原細見』から出発

その人物の最初の活躍の舞台となる江戸の遊郭があった吉原の歴史から紹介します。江戸時代初期の元和三（一六一七）年、現在の日本橋人形町に幕府公認の吉原遊郭が誕生しました。江戸には全国の大木屋敷があり、独身の若者が多数生活していたため、そのような施設の需要があったのです。しかし明暦三（一六五七）年の大火・振袖火事で江戸の大半が焼滅してしまいました。

幕府は江戸再建の一環として吉原遊廓を浅草に移転させました（図1）。その吉原で寛延三（一七五〇）年に誕生したのが蔦屋重三郎でした。商売の才覚があった重三郎は二二歳になった安永初（一七七二）年に吉原付近に販売と貸本を商売とする「耕書堂」という書店を開店します。最初は『吉原細見』という遊郭案内の販売をしていましたが、翌年には最初の書籍を出版します。



図1 吉原遊廓

『吉原細見』は遊郭の略図、遊女の名前、遊戯の料金などを説明する案内図書で、最初一枚の簡素なものでしたが、次第に書籍仕立てになり、やがて毎年春秋に二回の改訂があり、明治時代初期まで存在していたベストセラーでした。重三郎は安永四（一七七五）年に、この『吉原細見』を出版する権利を購入し、様々な工夫をした内容にして、一気に販売部数を拡大することに成功します。

この程度の成功に安住することのない性格の重三郎は発想が豊富で、次々と新規の出版を企画します。『吉原細見』を出版した翌年の安永五（一七七六）年正月には三巻からなる『青楼美人合姿鏡』を出版しました。浮世絵師の北尾重政と勝川春章の描写した遊女の絵姿と彼女たちの発句を掲載した三巻の超豪華本で、自身で序文を執筆するほどの力作で好評でした。

さらに分野を拡大し、まず浮世絵の分野に進出します。上記の三巻と前後して、浮世絵師の磯田湖竜齋が描写した美人の錦絵を「雛形若菜初模様」として順次発売して天明初（一七八一）年までの五年で一〇〇枚程度発売し、人気となります。また富本

節という三味線音楽が流行したときには、著名な浮世絵師の美人画を表紙にして富本節の歌詞を印刷した『富本正本』を出版して大儲けします。

このように世間の流行に敏感に対応したのが重三郎の商売が繁盛した理由ですが、安永四（一七七五）年頃から大人を対象とした絵本の一種である表紙に黄色の用紙を使用した「黄表紙」が流行しはじめると、早速、出版を開始し、『竜都四国噂』『夜野中狐物』などを最初として、恋川春町、山東京伝、四方山人など著名な浮世絵師を起用して、毎年、一〇種程を発刊して成功します。

次々と人気作家を輩出

このような順調な業績を背景に、創業の吉原の書店の運営を手代に委任し、天明三（一七八三）年に都心の日本橋通油町（現在の日本橋大伝馬町）に「耕書堂」を移転します（図2）。その翌年には何枚もの吉原の遊女の絵姿を一冊にした『吉原傾城美人合自筆鏡』を発売したところ好調な売行きになります。この時期には喜多川歌麿が蔦屋に寄宿しており、作品を出版しています。

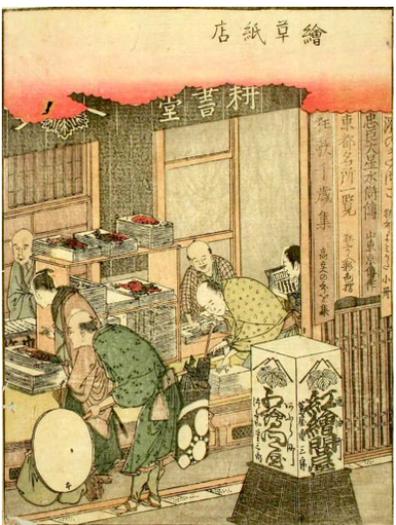


図2 耕書堂（葛飾北斎画）

このような人気商品を次々と出版した効果で、商売はますます順調になります。本店を移転してから二年が経過して、山東京伝が文章と挿画を執筆した黄表紙『江戸生艶気樺焼』を出版したところ再版になるほどの人気作品となり、続編ともなる黄表紙『碑文谷利生四竹節』も売行き好調でした。京伝が人気作家になったのは重三郎の多大な支援の結果ということができません。

このように重三郎の「耕書堂」との関係で活躍した戯作作家は『金金先生栄華夢』（安永四年）の恋川春町、『廓花扇観世水』（安永九年）の山東京伝、『椿説弓張月』（文化四々八年）の曲亭馬琴など多数存在しますが、最大の貢献は喜多川歌麿と東洲斎写楽という江戸文化を代表する浮世絵師を社会に紹介したことです。ところが、重三郎の仕事に試練が襲来しました。

寛政の改革で暗転

第九代将軍の徳川家重と第一〇代将軍の徳川家治の治世の期間（一七四五〜八六）は田沼時代という呼名もあり、老中首座であった遠江相良藩主の田沼意次が絶大な権勢を維持していました（図3）。そのような安定した期間の後半に重三郎の出版事業は繁栄していましたが、天明六（一七八七）年に田沼が失脚、翌年に奥州白河藩主の松平定信が老中首座となりました（図4）。



図3 田沼意次（1719-88）



図4 松平定信（1759-1829）

田沼時代は経済振興を政策の中心として推進し、社会は発展して江戸や大坂などの都会では文化が開花した一方、政治の腐敗や賄賂の横行などとともに、天明三（一七八三）年の浅間山大噴火による天明の飢饉が発生して農村は疲弊し、各地で一揆が頻発するなどの側面もありました。そこで松平は田沼時代の悪習を一掃して社会を再生する寛政の改革を実行します。

時代の変化に敏感な重三郎は松平が老中に就任した翌年の天明八（一七八九）年に黄表紙『文武二道万石通』を出版し、時代は鎌倉時代に設定したものの、武士が幕府の政策転換に右往左往する様子を滑稽に表現しました。これは江戸の庶民に好評であったため、次々と類似の書物を発行しますが、強烈な風刺は幕府の忌避するところとなり発禁処分になってしまいました。

さらに幕府は寛政二（一七九〇）年に書物や錦絵の出版取締命令を発表しますが、「白河の清きに魚も棲みかねて／もとの濁りの田沼恋しき」という狂歌が流行したように、この政策は悪評でした。そこで重三郎は江戸っ子の意地から山東京伝による幕府の政策を揶揄する書物を出版したところ、書物は絶版、京伝は手鎖五〇日、重三郎は財産の半分没収という刑罰になってしまいました。

世界三大肖像画家・写楽の誕生

繁盛している江戸有数の版元とはいえ、財産の半分も没収されたことは大変な痛手であったことは十分に想像できますが、流石に江戸っ子の重三郎は書籍の出版こそしなかったものの、江戸の芸術の歴史に偉大な財産を誕生させました。刑罰から四年が経過した寛政六（一七九四）年、彗星のように一人の浮世絵師を登場させ、大変な評判絵師にしたのです。東洲齋写楽の誕生です。

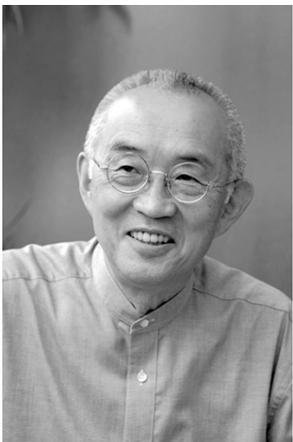
寛政時代には江戸三座（都座／桐座／河原崎座）といわれる芝居小屋が開業していましたが、寛政六年の五月公演に出演している役者の上半身を描写した大首絵といわれる浮世絵が合計二八点発売されました。画家の名前は東洲齋写楽です。大首絵は喜多川歌麿にもありますが形式重視である一方、写楽の作品はそれぞれ役柄の特徴を強烈に表現した個性のある描写でした（図5）。



図5 三代目大谷鬼次の
奴江戸兵衛

以後、翌年一月までに合計して一四〇点ほどの作品が発表されますが、作者は発表されませんでした。それ以後、様々な推定がなされてきましたが、現在でも確定していません。ドイツの評者J・クルトが「ベラスケス、レンブラントとともに世界三大肖像画家」と絶賛している絵師ですが、世界に現存する作品は六〇〇枚程度しかなく、想像もできない価値になっています。

この世界の宝物となった浮世絵を発表してから二年が経過した寛政八（一七九六）年秋に重三郎は脚気となって寝込むようになり、翌年五月に病没しました。四八歳でした。筆者の想像ですが、晩年になって重三郎が匿名の素晴らしい絵師を誕生させたのは、寛政の改革によって表現の自由が束縛されたことへの江戸っ子としての反抗の意思の表明ではないかと想像します。



つきお よしお 1942年名古屋生まれ。1965年東京大学工学部卒業。工学博士。名古屋大学教授、東京大学教授などを経て東京大学名誉教授。2002、03年総務省総務審議官。これまでコンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策などを研究。全国各地でカヌーとクロスカントリーをしながら、知床半島塾、羊蹄山麓塾、釧路湿原塾、白馬仰山塾、宮川清流塾、瀬戸内海塾などを主催し、地域の有志とともに環境保護や地域計画に取り組む。主要著書に『日本 百年の転換戦略』（講談社）、『縮小文明の展望』（東京大学出版会）、『地球共生』（講談社）、『地球の救い方』、『水の話』（遊行社）、『100年先を読む』（モラロジー研究所）、『先住民族の叡智』（遊行社）、『誰も言わなかった！本当は怖いビッグデータとサイバー戦争のカラクリ』（アスコム）、『日本が世界地図から消滅しないための戦略』（致知出版社）、『幸福実感社会への転進』（モラロジー研究所）、『転換日本 地域創成の展望』（東京大学出版会）など。最新刊は『凜凜たる人生』（遊行社）。